

「命てんでんこ」の実践はなぜ難しいのか

— 土砂災害ジレンマ状況における感情と理性のギャップ —

○前田楓¹・橋本博文²

(¹安田女子大学大学院文学研究科・²安田女子大学心理学部心理学科)

目的

自分の命は自分で守るという「命てんでんこ」の実践はなぜ難しいのか。本研究の目的は、場面想定法を用いた質問紙調査（研究1）および実験（研究2）の結果をもとに、災害場面で生じる利他的感情が命てんでんこの実践を阻む可能性について検討することにある。

方法（研究1）

調査対象者 広島県内の女子大学生 236名。

調査項目 Kodama（2013）を参考に、土砂災害ジレンマ状況における命てんでんこの実践意図を尋ねるための質問紙を本研究独自に作成した。具体的には、土砂災害場面を想定させた上で「自分の命を守るために逃げる」もしくは「相手の命を守るために相手を助けに行く」のどちらの行動をとるかを尋ねた。また、二者間の意思決定の組み合わせ（表1）を提示し、それぞれの結果がどの程度望ましいかを7件法（-3=「まったく望ましくない」、+3=「非常に望ましい」）で尋ねた。

結果（研究1）

31.4%（74/236）の人たちが、土砂災害ジレンマ状況において「相手を助けに行く」という選択を行っており、命てんでんこの実践の難しさが示された。また、結果の望ましき評定のパターン（表1）から、本人の行動選択によらずRRの望ましき得点が最も高いこと、本人の行動選択によって、RR, HR, HHの望ましき得点に有意差が見られること（ $ts \geq 2.82, ps < .01$ ）が明らかにされた。

方法（研究2）

実験対象者 広島県内の女子大学生 154名。（一週目に154名、二週目に133名参加した。）

手続き 研究1で用いた質問項目に加えて、命てんでんこに関する感情と理性の側面を測定するための項目を用意し追試調査を行った（一週目）。その翌週（二週目）には、矢守（2010）を参考に、命てんでんこの「自助原則」ないし「他者避難の促進機能」のいずれかを強調する教示文を実験対象者に提示した上で、あらためて命てんでんこに関する感情・理性を測定する項目を含む質問紙に回答を求めた。ここでは、一週目と二週

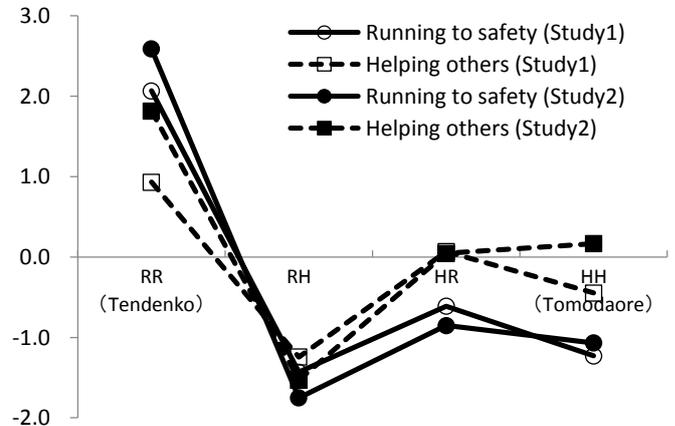


表1. 研究1・2における行動選択ごとの望ましき評定値
注1) RR: 互いに逃げる（命てんでんこの実践）、RH: 自分は逃げて相手は助けに行く、HR: 自分は助けに行き相手は逃げる、HH: 互いに助けに行く（共倒れ）
注2) 研究1では大切な人との土砂災害ジレンマ状況を、研究2では家族・友人とのジレンマ状況を想定させた。

目の変化量を分析の主眼とした。

結果（研究2）

研究2の結果は、研究1の結果をおおむね再現するものであった。42.9%（66/154）の人たちが「相手を助けに行く」という選択をし、行動の望ましき得点に関してもほぼ同様の結果が得られた（表1）。また、命てんでんこの実践を阻む要因として、土砂災害場面で働く利他的感情が存在すること、また、そうした感情は、命てんでんこの「他者避難の促進機能」を強調することではじめて抑制されることも実験の結果から明らかにされた。

総合考察

場面想定法による土砂災害ジレンマ状況において、実際に人々は命てんでんこの実践に抵抗感を示すこと、そしてその抵抗感は災害場面で誰かを助けようとする利他的感情にもとづくものであることが示された。さらに、実験的手法を用いた研究2の結果より、抵抗感を生み出す要因である利他的感情は、自分が逃げることによって他の人たちの避難を促すという「他者避難の促進機能」を強調することによって有意に抑制されることが明らかにされた。これらの結果は、学校教育における効果的な防災教育のあり方を検討する上で、示唆に富む結果である。